

日本語学習者における スタイル変異形式の 使用規則の形成

—使用実態と使用意識に着目して

今村圭介

●要旨

本稿では、日本語学習者のスタイル変異形式 (SVI) の使用規則に差異が形成される要因を明らかにする。まず使用実態の調査として、6名の英語を母語とする日本語学習者の対親場面と対疎場面の2場面における談話を収録し、そこで現れたスタイル変異の使用実態を記述した。またその後スタイル変異の使用についての意識をインタビューにより調査した。その結果、学習者は以下の要因からSVIの使用規則を形成すると考えられた。A) 個人の社会言語学的規範、B) 個人のアイデンティティ、C) 各形式に関する知識、D) SVIの運用能力。つまり、学習者間のA)～D)の差異が学習者間のSVIの使用に差異を生みだしていると考えられた。

●キーワード

スタイル切り換え、変異、自称詞、文末形式、確認要求表現

●ABSTRACT

This paper discusses factors contributing to the development of rules for the usage of stylistic variation items among Japanese language learners. It describes the use of stylistic variation items of 6 English native learners of Japanese in the casual and formal conversations. In addition, it describes their perceptions and reasons behind the usages. As the result of the analysis, the following are considered to be main factors for the development of usage rules for stylistic variation items. These are 1) learners' sociolinguistic norm, 2) learners' identity, 3) learners' linguistic knowledge of the items, and 4) learners' proficiency in the items. Therefore, differences in the usage of stylistic variation among the learners can be attributed to these factors.

●KEY WORDS

Style-shifting, variation, first-person pronoun, copula, verification demands

On the Development of Usage Rules of
Stylistic Variation Items
among Japanese Language Learners
From descriptive data of learners' use and
their language perceptions
KEISUKE IMAMURA

1 はじめに

本稿では、日本語母語話者が場面間で体系的に切り換えているスタイル変異形式 (Stylistic Variation Items, 以下SVI) を、英語を母語とする日本語学習者がどのように使用しているかを記述し、その規則の形成要因を明らかにする。近年、日本に滞在する日本語学習者は多様化し、それぞれの学習者の日本語使用場面は広がりを見せている。そのため、日本語学習者にも場面に即した言語使用が求められ、『日本語教育』134号でバリエーション (変異) の特集が組まれるなど、日本語教育におけるバリエーションや、スタイル変異に対する意識も上がっている。それと同時に日本語学習者のSVIの使用状況の記述も進んできている。しかし、その使用規則の形成要因については詳細に記述されておらず、日本語教育におけるSVIを扱う留意点などは十分に議論されていない。SVIは不適切な使用が円滑な人間関係構築に不利につながる可能性があり、研究が進められるべき課題である。本稿で学習者のSVIの使用規則の形成要因を明らかにすることで、指導上の留意点を少しでも示唆できるのではないかと考える。

2 研究背景

2.1 スタイル変異形式 (SVI) とは

変異は現れる環境によって図1のように分類できる。スタイル変異 (stylistic variation) とは、その中でも話者内変異 (intra-speaker variation) で、特に社会的・心理的要因によって切り換えられるものを指す。

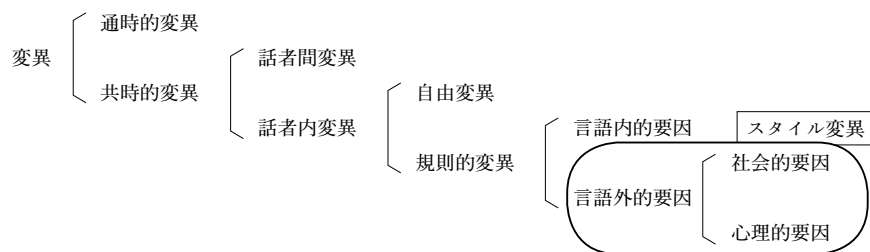


図1 変異の類型 (Ellis 2008の図を参考に作成)

話者内変異は自由変異と規則的変異に分けることができ、その規則性がどのような要因によってつくられるかによっても分類できる。言語内的要因とは、例えば、ら抜き言葉が2音節より3音節、3音節より4音節の単語により起こりやすいというような、言語そのものに規則が起因するものである。言語外的要因は社会的要因と心理的要因に分けられるが、厳密な意味で区別することは難しいとされる (Ellis 2008)。

話者は、社会・心理的要因により、様々な変異を形成し、使い分ける。それは、音声、音韻体系、統語、文法、意味論、語彙、談話の中の広い意味での話し方まで多岐にわたる (Bell 1997:240)。しかし、全ての特徴を分析することはできないため、本稿では形式のみに分析対象を絞る。渋谷 (2007) ではバリエーションを表1のように分類している。

表1 広義の言語変異 (渋谷 2007:7を一部改編)

レベル	意味機能	意味・機能は同じ形式に注目	特徴的な1つの形式に注目
音・語彙等		言語変異	社会指標形式
発話		言語行動	社会指標行動

本稿では、音・語彙等のレベルの言語変異、社会指標形式について、着目していく。つまり、本稿が考察の対象として注目するスタイル変異形式 (SVI) とは、社会・心理的要因によって切り換えられる話者内変異で、音・語彙レベルのものである。

2.2 先行研究

ここでは、日本語学習者のスタイル変異に関する先行研究を概観する。李 (2002)、樋下 (2002)、橋本 (2002) では、それぞれ韓国語、英語、中国語を母語とする日本語学習者が切り換える項目について体系的に記述が行われている。結果として、中級レベルの日本語学習者は、場面に応じて多様な言語項目を切り換えていることが明らかになっている。

李 (2005) では、韓国語を母語とする日本語学習者がスタイル切り換えの能力を発達させる過程と要因を明らかにしている。結果として、韓国語母語話者

は母語の社会言語学的規範や、母語の同様の項目の切り換えの体系を利用して、日本語におけるスタイル切り換え能力を身に付けているとしている。

また寺尾(2010)では、中国語を母語とする学習者の文末形式のスタイル切り換えの特徴を縦断的データから明らかにしている。その結果、日本語では待遇規範によって起こる文末形式の切り換えが、言語内的要因によって阻害されていることを考察している。

しかし、先行研究では言語内的要因や母語の影響などに焦点が当てられているため、学習者間でSVIの使用規則に差異が存在する心理・社会的な要因やその他の要因が十分に明らかになっていない。複数の学習者に関してSVIの使用規則の詳細な形成過程を明らかにし、共通点・相違点を探る必要があると考えられる。その結果から、スタイル変異の指導に示唆が与えられると考えられる。

3 研究概要

3.1 研究目的

本研究では、学習者によるスタイル変異形式(SVI)の使用規則の形成要因を、談話収録と詳しいインタビュー調査によって明らかにする。

3.2 研究方法

本研究では、以下の2種類の調査を行った。

- (a) 日本国内在住の英語を母語とする中上級の日本語学習者6名の2場面の談話収録(各約30分、計360分)
- (b) 各SVIの習得に関する意識、および収録談話に関するインタビュー

(a)の談話収録は、学習者のフォーマルな談話とカジュアルな談話でのSVIの使用を記述するために行った。設定した2場面は、対話者が、同年代・同性・同所属集団(教会)で親しい相手(筆者)である対親場面と、対話者が年上(60

代)・異性・異所属集団で初対面の相手である対疎場面である。なお、6名の学習者の対話者は2場面共に同一人物である。また、談話収録は喫茶店で行い、話題の統制などは行っていない。(b)のインタビューは、談話終了後にSVIの使用意識や習得意識の聞き取りを行った。文字化終了後にフォローアップインタビューとして、不可解なSVI使用の意図について聞き取りを行った。調査を行った学習者の情報は表2に示す。なお、対話相手に選定した2人は共に生え抜きの東京方言話者であり、方言の影響は排除している。

表2 学習者の情報

学習者	出身	年齢	日本語学習歴	日本滞在歴	レベル ^[注1]	性別
AM1	アメリカ	21	3年	1年	中級	男性
AM2	アメリカ	23	3年	1年	中級	男性
AU1	オーストラリア	28	16年	6年	中級	男性
AM3	アメリカ	28	9年	6年	上級	男性
NZ1	ニュージーランド	23	7年	3年	上級	男性
CA1	カナダ	29	8年	3年	上級	男性

3.3 調査手順

調査は以下の手順で行った。

- ①各学習者に、日本語の研究のために30分ほど、筆者ともう1人の中年女性と1対1で話をして欲しいと、事前をお願いをする
- ②学習者と駅で待ち合わせし、喫茶店に行って対親場面の対話者である筆者との会話の録音を行う
- ③対疎場面の話者に30分ほど経過したタイミングで喫茶店に来てもらう
- ④その場でお互いを紹介し、録音機をセットし、調査者は喫茶店を出る
- ⑤30分が経過したら、喫茶店に戻り、対疎場面の話者は退席する
- ⑥SVIの使用、習得意識に関するインタビューを行う
- ⑦後日、必要であれば談話内の使用形式に関するフォローアップインタビューを行う

3.4 分析項目

分析の対象とした項目は、調査対象者の内1人でも場面間の切り換えが観察できた、文末形式、原因・理由の接続助詞、逆接・前提の接続助詞、自称詞、義務（当為）表現、確認要求表現である。縮約形や対称詞など、切り換えをしていると考えられる項目は他にも存在するが、談話で使用されていないため、分析に含めない。

4 調査結果

以下、談話におけるSVIの使用実態と使用意識を記述していく。表内の実数は談話での形式の使用数である。文字の囲いは、学習者が調査の時はほとんど使用しなかったが、似たような場面で使用すると述べている形式である。なお表内の「親」は対親場面、「疎」は対疎場面の略である。

4.1 文末形式

丁寧体と普通体は対者待遇を表す代表的な形式であり、使い分けがほぼ必須の項目である。学習者の談話での使用数と使用意識は表3のとおりである。AM1、AU1、AM3、NZ1、CA1は全て丁寧体と普通体を使い分けしている。対してAM2は丁寧体の使用は対疎場面のみ使用するが、普通体（非丁寧形）の使用は対親場面に限らず対疎場面でも使用している。意識としてもAM2は「あまり使い分けなくてもいいと思っている。外人だから許される」と述べている。AM2と比べ、他の学習者は切り換えの義務意識が強くあるようであった。しかし少数ではあるが、規範に逸脱する形で、対親場面での丁寧体の使用、対疎場面での普通体（非丁寧）の使用が見られる。

表3 談話内の文末形式の使用数と使用意識^[注2]

	AM1		AM2		AU1		AM3		NZ1		CA1		
	親	疎	親	疎	親	疎	親	疎	親	疎	親	疎	
丁寧体	0	74	0	27	0	64	1	108	1	94	5	112	
普通体	中立	49	24	50	28	54	12	58	24	78	12	42	16
	非丁寧	34	3	10	9	8	0	13	1	41	0	34	0

4.2 逆接・前提の接続助詞

ケドはケレドモの縮約形とされるが、会話での使用はケドが圧倒的に多く、教科書でもケドが最初に導入される。学習者の逆接・前提の接続助詞の談話での使用数と使用意識は表4のとおりである。AM3はケレドモ・ガを丁寧と認識し、ケドモを対疎場面で使用している^[注3]。使用規則は前節の丁寧形／普通形に影響され、ケドが普通形、ケドモが丁寧形に付くという規則を形成していた。CA1も同様にケレドモ・ガを丁寧と認識していたが、使用には至っていない。CA1は以前受けた就職面接ではガを使用したと述べている。AU1は、ケレドモは電話会話、ガはニュースなどで使用されると認識し、普段の会話では使わないと述べている。

表4 談話での逆接・前提の接続助詞の使用数と使用意識

	AM1		AM2		AU1		AM3		NZ1		CA1	
	親	疎	親	疎	親	疎	親	疎	親	疎	親	疎
ガ	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0
ケドモ	0	0	0	0	0	0	0	23	0	0	0	0
ケド	17	16	15	19	28	25	18	8	30	25	39	35

4.3 原因・理由の接続助詞

原因・理由の接続表現は、多くの教科書でカラのほうがノデより先に導入される。談話での原因・理由の接続助詞の使用数と使用意識は表5のとおりである。AU1はノデをフォーマルな形式と認識し、対疎場面で使用している。一方、NZ1はカラ・ノデの両方を両場面で使用し、両者の使い分けの基準は特にわからないと述べている。CA1はノデのほうが丁寧ということを認識しているが、対疎場面での使用には至っていない。就職面接では使用したと述べている。他の学習者AM1、AM2、AM3はカラとノデの違いを特に認識せず、カラのみを使用している。

表5 談話での原因・理由の接続助詞の使用数^[註4]と使用意識

	AM1		AM2		AU1		AM3		NZ1		CA1	
	親	疎	親	疎	親	疎	親	疎	親	疎	親	疎
ノデ	0	0	0	0	0	10	0	0	3	12	0	0
カラ	13	8	11	9	20	0	33	44	4	7	11	11

4.4 自称詞

自称詞は多くの教科書でワタシが導入される。学習者の談話での自称詞の使用数と使用意識は、表6のとおりである。AM2、AM3、CA1はボクを使用しているが、それぞれ以前に「ワタシを自称詞として用いるのは変だ」と日本人の友人に指摘されて使用形式を変えたと述べている。AM2は「男友達には、いつもオレを使用するが、調査と聞いていたため、今回の会話ではボクを使用した」と述べている。また、AM1、AU1はオレを男らしい形式として認識していると同時に、失礼にもなりうる形式として認識していて、対疎場面では使用を避け、ワタシを使用している。AU1は「男友達にはオレ、女友達にはボクを使ったりする」と述べているが、対親場面はオレ、ボク、ワタシを使用している。またNZ1は「年上にはボクではなくジブンを使用するように日本人の友人から促され、使うようにしているがボクも使う」と述べている。CA1は就職面接ではワタシを使用した、今回の対疎場面ではワタシを使用しなくてもいいと思ったと述べている。

表6 談話での自称詞の使用数^[註5]と使用意識

	AM1		AM2		AU1		AM3		NZ1		CA1	
	親	疎	親	疎	親	疎	親	疎	親	疎	親	疎
ワタシ	0	20	0	0	2	8	0	2	0	0	0	1
ボク	0	0	16	24	4	1	32	23	0	4	2	6
ジブン	0	0	0	0	0	0	0	0	1	14	0	0
オレ	27	4	0	0	2	0	0	0	48	0	0	0

4.5 義務(当為)表現

義務(当為)表現は多くの教科書でナケレバナラナイが最初に提示されるが、ナキヤイケナイがカジュアルな場面で最も多く使用される(小西2008)。学習者の談話での義務表現の使用数と使用意識は表7のとおりである。AM1、AM2、NZ1は使用・意識ともに確認できなかった。AU1は母語話者がナキヤイケナイを使用していて、「周りの日本人が使うから使うようになった」と述べている。また、AM3はナイトナラナイを使用し、「最初にナケレバナラナイを覚えて、その後ナイトナラナイ、ナイトイケナイを順番に覚えるようにした」と述べ、特にスタイル的な使い分けは意識していないようである。CA1はナイトイケナイとナケレバナラナイを使用している。「母語話者にどの形式が一番使うかと尋ねたらナイトイケナイと言われたため、使うようにしているが、就職面接でナケレバナラナイを何度も使ったため、対疎場面と対親場面ともにナケレバナラナイを使用してしまった」と述べている。

表7 談話内の義務表現の使用数と使用意識

	AM1		AM2		AU1		AM3		NZ1		CA1	
	親	疎	親	疎	親	疎	親	疎	親	疎	親	疎
ナケレバナラナイ	0	0	0	0	0	2	1	0	0	0	6	2
ナイトナラナイ	0	0	0	0	0	0	6	6	0	0	0	0
ナイトイケナイ	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0	3	0
ナクチャイケナイ	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
ナキヤイケナイ	0	0	1	0	9	0	0	0	0	0	0	0

4.6 確認要求表現

確認要求表現の使用は、Brown & Levinson (1987) が述べるポジティブ・ポライトネスストラテジーの1つである。つまり、「確認要求」という発話行為自体の使用頻度が場面によって変化してくると思われる。学習者の談話での確認要求表現は、表8のとおりである。学習者の確認要求表現の習得に関する意識はほとんどわからなかった。しかし、AU1のみ、「デショウは自分が正しい

ことを相手に押し付ける感じがあるため、フォーマルな場面では使用しないと述べ、対疎場面では、ジャンイデスカを使用している。AM3、NZ1、CA1は対親場面に比べ、対疎場面でのジャンイ・ジャン・デショウの使用が減少するが、特に切り換えの意識はなかった。形式自体への意識ではなく、無意識的に確認要求表現の使用自体がフォーマルな場面で制限されると考えられる。

表8 談話内の確認要求表現の使用数^[注6]

	AM1		AM2		AU1		AM3		NZ1		CA1	
	親	疎	親	疎	親	疎	親	疎	親	疎	親	疎
ジャンイデスカ	0	0	0	0	0	6	0	0	0	0	0	0
ジャンイ	3	0	0	0	16	0	2	0	0	0	4	0
ジャン	0	0	0	0	7	0	0	0	9	1	1	0
デショウ	17	11	0	0	3	0	16	3	0	0	7	0

5 学習者のSVI使用規則の形成

以上の記述を基に、学習者のスタイル変異形式（SVI）の使用規則に影響を与える要因を考察し、使用に至るプロセスを考察する。

5.1 個人の社会言語学的規範

学習者は個人の持つ社会言語学的規範を表す形でSVIを使用する。すなわち、学習者は「この場面で相手には丁寧話す」というような規範意識をそれぞれ持ち、そうした切り換え意識を表現するリソースとしてSVIを利用するのである。対疎場面は全ての学習者に同じ環境（初対面・カフェでの会話）での会話であるが、学習者間で「どの程度丁寧に話すべきか」に関しては差が見られた。AM2とCA1はあまり丁寧に話さなくてよいと思ったと述べているのに対して、他の学習者は丁寧に話すように努めたと述べている。

結果として、そのような意識を反映させる形でCA1は、フォーマルな場面で使うワタシやノデを対疎場面で使用していない。対して他の学習者は全て、

フォーマルな場面で使うと認識している項目を全て対疎場面で使用している。AU1はさらに、デショウの使用に関して、「母語でも絶対にしない」と述べている。母語で培った社会言語学的規範を日本語のコミュニケーションにも応用していることがわかる。つまり、学習者間で場の認識と場面ごとの言語使用の規範が異なっていることがわかる。

一方で、全ての学習者が丁寧体と普通体を切り換えていることを考えると、そこに英語を母語とする学習者に共通した社会言語学的規範が存在するのではないかと考えることができる。つまり、英語圏の話者は上下関係を「わきまえる」（井出1986）る社会言語学的な規範を持っていて、それが丁寧体と普通体の使い分けに表出するのである^[注7]。

学習者の丁寧体と普通体の使用を見た、上仲（1997,2007）、田（2009）、李（2003）などの研究成果を統合してみても、丁寧体と普通体の使い分けには母語による傾向が見られることがわかる。すなわち、中国語母語話者は上下関係や立場関係によるわきまえなしに親疎関係で使い分け、英語母語話者と韓国語母語話者は上下関係をわきまえて使い分けるのである。

つまり、学習者が母文化で培った社会言語学的規範は、個人によって異なるが、母語に共通する部分があり、それが、同じ母語話者のSVI使用規則の共通点として現れると考えられる。

5.2 アイデンティティの影響

学習者は個人のアイデンティティ、特に男らしさや日本語母語話者らしさを表現するために、SVIを選択する様子が見られた。このようなアイデンティティの強さは学習者によって異なり、学習者間のSVI使用規則に差異を生じさせている。

AM3に「なぜボクを使用するのか」と聞いたところ、「まず、オレは1回テストで使ったら先生にびっくりされてそれから使わなくなった。ワタシは友達にオカミみたいと言われて使わなくなった。今では男の人でオレもワタシも使う人がいるのはわかる。でも、僕はボクだ」と述べている。つまり、AM3のアイデンティティを表現する形式はボクであると認識している。対してAM1は、「ボクはダサイから使用しない」と述べ、ボクの使用に対して否定的であ

る。使用している人を見て自分のアイデンティティに合わないことを感じたのであろう。自称詞の選択は特にアイデンティティの影響を受けやすいと考えられる。

また、AUIがナキャイケナイを対親場面で使用する理由、CAIがナイトイケナイを使用する理由は、母語話者が使っている（と聞いた）からである。学習者には、第二言語話者としてではなく、日本語話者としてのアイデンティティがあり、SVIの選択に影響している。

5.3 SVIに関する規範知識

さらに、学習者のSVIの使用規則の形成には、各形式に関する明示的規範知識があるかどうかの影響する。フォーマルな場面をより多く経験すれば、学習者はその場面の言語使用に関する規範を理解することが多くなる。また、そのような状況を経験すれば、形式間の差異に関して、学習者から明示的な知識を求めたり、求めなくても母語話者から明示的知識を与えられたりすることが起こる。例えば、CAIは義務表現の複数の形式を覚えたとき、「日本人が使用する形式はどれか」と母語話者に聞き、ナイトイケナイを使用するという回答を得て、使用するようになっていく。また、NZIは自称詞ボクの使用に関して、日本語母語話者の友人に「フォーマルな場面でボクはダサイからジブンを使え」と言われ修正している。つまり、各場面の言語使用を重ねる中で、明示的・暗示的知識を獲得することによって、それぞれの言語使用を形作っている。自称詞に関してはAM2、AM3、CAIも母語話者から明示的な知識を獲得し、使用形式を変更している。

また、日本語学習者は母語話者から場面ごとの使用形式に関する明示的知識を得ている場合に加え、日々の日本語使用を重ねる中で暗示的な知識を得て、感覚的に形式の使用範囲を理解し説明できるようになることもある。例えば、AUIは自身がケレドモを使用しないことに関して、「母語話者は電話対応などの時にしか使っていないのではないか」と普段の言語使用の観察から理由を述べている。義務表現は、ボランティア教室の教師が使用していたため、ナケレバナラナイがフォーマルな場面で使う形式だと認識したと述べている。

逆に明示的知識を獲得しないために、使い分けに至らないケースも多く見ら

れる。例えば、ノデ・カラの待遇的価値の違いを、AM1、AM2、NZIは理解しておらず、使い分けに至っていない。

5.4 SVIの運用能力の差

さらに、そのような規範意識や、アイデンティティ、SVIについての知識から学習者内に規範があっても実際の運用がうまくいかない場合も多々見られた^[注8]。すなわち、学習者のSVIの運用能力の差が実使用の差に表れるのである。

まず、意識に反してSVIの形式を使用してしまう場合がある。例えば、AM1は使い慣れてないことを理由に普通体、オレなど、対疎場面で使うべきでないとして本人が認識している形式も使用している。またCAIは前日にフォーマルな就職面接があったため、丁寧な言葉が抜けないと述べ、意識に反して対親場面で「丁寧体」を使用し、また、義務表現については、使用すべきと考えているナイトイケナイではなく、ナケレバナラナイを使用している。さらに、ほとんどの学習者が対疎場面収録の後に行ったインタビューで対親場面の話者である筆者に丁寧体を使用していた。つまり、SVIの運用能力が、スタイル切り換えに大きく影響することが観察される。

さらに、運用が難しい場合に、相手との関係などを考慮し、自分の規範を緩やかにする傾向も見られた。AM1は対疎場面で使用したカジュアルな形式に関して、「慣れてないからしょうがない」と述べている。また、CAIは対疎場面で使用しなかったノデやガに関して、「フレンドリーだから使用しなくていいと思った」と述べているが、「先日の面接ではそれらを使用して話し方がぎこちなくなった」という話から、社会言語学的規範の他にSVIの当該形式の運用能力の問題が影響している可能性も指摘できる。もし、簡単に切り換えができるのであれば、切り換えたかもしれない。そして、NZIも対疎場面でジブンの使用を促されても、ボクとジブンの両方を使用している。再帰代名詞としての機能を持つジブンは、ボクやオレと比べ統語規則が異なるため、オレと単純な置き換えができない場合に、回避形式としてボクを使用していた。

5.5 学習者のスタイル変異形式 (SVI) の使用プロセス

以上の考察結果は以下の図2のようにまとめられる。まずは、それぞれの学習者の習得環境によって各SVIを習得する。そして、個人のアイデンティティや社会言語学的規範、各SVI規範の知識フィルターを通して、それらの場面ごとの運用規範が形成される。そして、実際の運用時には、切り換え能力の問題から規範と多少異なるSVIが使用される。学習者間の差異は、習得環境での習得SVIの差、規範フィルターとなるアイデンティティ、社会言語学的規範、SVIの規範知識が異なるために形成されると考えられる。

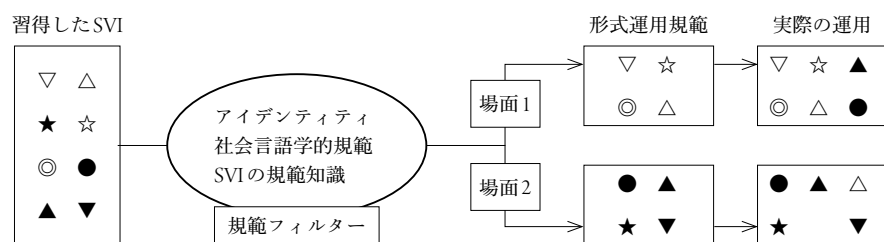


図2 日本語学習者のスタイル変異形式 (SVI) の使用プロセスの概念図

6 スタイル教育に向けて

ここまで学習者のSVIの使用規則の形成について考察してきた。学習者は、個人の社会言語学的規範により、SVI運用の枠組みの基盤が存在している。その上に、個人のアイデンティティ、SVIに関する明示的知識、SVIの運用能力によって、実際のSVI使用規則が決まる。そこで日本語教育において、A) 明確な使用規範を提示し学習者の理解を促進すること、B) 異なる場面でのSVIの切り換え運用練習を十分に行うこと、の必要性が指摘できる。

まず、母語話者のSVIの使用規範を明確に示すことで、学習者が無意識に母語話者に不快感を与えることを避けると同時に、学習者の過度な切り換えを防

ぐ必要がある。学習者は、場や相手との関係などから、スタイルを切り換える必要を感じても、どの形式をどのような場で切り換えるのか分からないケースが多い。そこで、SVIの使用規範を明確に提示し、学習者の理解を促進する必要がある。そうした理解を促進する授業を中級以降で一度でも持つことで、学習者のSVIの運用体系が大きく変わる可能性がある。

さらに、SVIの切り換え能力を向上させるために、普段からの十分な注意と運用練習が学習者に必要になってくる。教師は、文法ミスは訂正しても、不適切なSVIの使用は訂正することが少ないのではないだろうか。普段の授業活動の中で、正しい文法の使用とともに場に適切なSVIの選択を心がけるように指導することが重要である。例えば、教師に対しては必ずフォーマルな形式を使用することを徹底するなどの工夫が必要である。

そして、SVIの切り換えを指導する際は、学習者1人1人が異なる社会言語学的規範とアイデンティティを持っているということを理解する必要がある。ある学習者は、日本語のSVIの使用規範に近い社会言語学的規範や規範を受け入れやすいアイデンティティを持っている一方、ある学習者はそうでない。つまり、SVIの運用がうまくいかない学習者や、適切な運用に抵抗がある学習者がいる。そのような学習者に理解を示し、彼らのアイデンティティを尊重した上でのSVIの指導が望まれる。

今後の課題は、指導の具体性を高めるために、母語話者が学習者に求めるSVIの使用規範を明らかにし、さらに指導実践を通して更なる示唆を与えたい。

〈首都大学東京大学院生〉

注

[注1] …… 学習者のレベルは厳密ではなく、牧野ほか(2001)を参考に、ACTFLのOPIの基準の、主にテキストの型から筆者が判断した。

[注2] …… 宇佐美(2007)の発話文認定を行い、その中で文末形式の選択が可能なものを分析対象とした。文末形式の分類は、野田(1998)、李(2003)を参考に行った。野田(1998)は普通体に、相手を待遇するか考えない中立形と、相手を待遇しない非丁寧形の2つの機能が存在するとしている。野田(1998)

は形式による分類は行っていないが、李（2003）は終助詞の有無や発話の終わり方でコーディングをしている。本稿では、終助詞がつく普通体、明らかに相手に発話向けられている普通体は非丁寧、それ以外で相手に発話向けられているか判断できないものを中立形とした。なお、本研究ではスピーチレベルシフト研究のような発話のミクロな部分は見ないため、厳密な発話文認定は必要ないと判断した。

- [注3] …… ケレドモの使用意識があるのにケドモを使用しているのは、両形式が音声的な縮約関係にあることから、学習者内に認識のずれが生じていると考えられる。
- [注4] …… カラとノデは置き換えが不可能な場合があるが、談話内でそのような用例は現れていない。
- [注5] …… なお、引用や直接話法の中の用例で、AM2に2例見られた1人称複数ワタシたちは分析対象からはずしている。
- [注6] …… 確認要求表現は、形式間の機能的な重なりは比較的少ないと考えられるが、松丸（2009）で述べられているように、東京方言話者はフォーマルな場面ではジャンイデスカを、カジュアルな場面ではその他の形式を使用している。
- [注7] …… 井出ほか（1986）では、敬語行動には個人の積極的なストラテジーによる「働きかけ方式」の敬語行動と、社会全体で共有される規範による受動的な「わきまえ方式」の敬語行動があると述べている。アメリカ人の敬語行動は「働きかけ方式」による敬語行動の割合が高く、日本人の敬語行動には「わきまえ方式」による敬語行動の割合が高いとしている。
- [注8] …… 本稿では、SVIの使用規範に関する知識と、実際に規範通りに使用する運用能力が別に存在すると考えている。

参考文献

- 李吉鎔（2002）「韓国語母語話者のスタイル切り換え」『阪大社会言語学研究ノート』4, pp.73-93. 大阪大学大学院文学研究科社会言語学講座
- 李吉鎔（2003）「フォーマルな談話での非デスマス形式の切り替え—日本語母語話者と中間言語話者の比較」『阪大社会言語学研究ノート』5, pp.79-96. 大阪大学大学院文学研究科社会言語学講座
- 李吉鎔（2005）『日本語学習者のスタイル切り換え能力の発達—韓国語母語話者を対象に』大阪大学博士論文
- 井出祥子・荻野綱男・川崎晶子・生田少子（1986）『日本人とアメリカ人の敬語行動—大学生の場合』南雲堂
- 上仲淳（1997）「中上級学習者の選択するスピーチレベルおよびスピーチレベルシフト」『日本語教育論集—小出詞子先生退職記念』pp.149-165. 凡人社
- 上仲淳（2007）「中国語を母語とする上級日本語学習者のスピーチレベルの選択基準」『大阪大学言語文化学』16, pp.141-154. 大阪大学言語文化学会
- 宇佐美まゆみ（2007）『改訂版：基本的な文字化の原則（Basic Transcription System for Japanese: BTSJ）2007年3月31日改訂版』

- 小西円（2008）「実態調査からみた「義務表現」のバリエーションとその出現傾向」『日本語教育』138, pp.73-82. 日本語教育学会
- 渋谷勝己（2007）「なぜ今日本語のバリエーションか」『日本語教育』134, pp.6-17. 日本語教育学会
- 寺尾綾（2010）「文末形式の運用とスタイル切り換え—日本語を学ぶ中国語母語話者の縦断データから」『阪大日本語研究』22, pp.113-142. 大阪大学大学院文学研究科日本語学講座
- 田鴻儒（2009）「中国における上級日本語学習者のスピーチレベルの使い分け—初対面会話相手の年齢に応じて」『大阪大学言語文化学』18, pp.169-181. 大阪大学言語文化学会
- 野田尚史（1998）「「ていねいさ」からみた文章・談話の構造」『国語学』194, pp.89-102. 国語学会
- 橋本貴子（2002）「英語母語話者のスタイル切り換え」『阪大社会言語学研究ノート』4, pp.94-113. 大阪大学大学院文学研究科社会言語学講座
- 樋下綾（2002）「中国語母語話者のスタイル切り換え」『阪大社会言語学研究ノート』4, pp.114-130. 大阪大学大学院文学研究科社会言語学講座
- 牧野成一・鎌田修・山内博之・斉藤真理子・荻原雅佳子・伊藤とく美・池崎美代子・中島和子（2001）『ACTFL-OPI入門—日本語学習者の「話す力」を客観的に測る』アルク
- 松丸真大（2009）「方言話者のスタイル切り換え」『月刊言語』26(11), pp.140-147. 大修館書店
- Bell, A (1997) Language style as audience design. *Sociolinguistics: a Reader and Coursebook* (pp.240-250). London: Palgrave.
- Brown, P. & Levinson, S. (1987) *Politeness: Some universals in language usage*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Ellis, R (2008) *The Study of Second Language Acquisition*. Oxford, London: Oxford University Press.

